

夜須高原

『ESD・SDGsの学び』ガイド

～ 学校団体用 ～



夜須高原『ESD・SDGsの学び』ガイド

— 目次 —

第1章		
「ESDと学校教育」	1
I ESDについて	1
II ESDと学習指導要領	3
第2章		
「SDGsとESD」	4
第3章		
「施設で行うESD・SDGs」	6
I 学校のESDに施設利用を位置づける場合	6
II 学校のESDに施設の活動プログラムを活用する場合	6
III 施設での活動全体をESDでデザインする場合	7
IV 施設での様々な生活をSDGsで意識化する場合	8
V 活動プログラムの中にSDGsの視点を入れる場合	9
第4章		
「ESDプログラム化の実際」	10
I 学校・施設でESDを始める手順例	10
II ESDのプログラム化へ	14
III 施設にある活動プログラムでの実施例	16
第5章		
「施設プログラムとSDGs」	21
施設で体験できるプログラム	21
【夜須高原で体験できる活動プログラム①】	27
【夜須高原で体験できる活動プログラム②】	28
【夜須高原で体験できる活動プログラム③】	30

はじめに

この度、国立夜須高原青少年自然の家では、6月5日「環境の日」に合わせ、本ガイドを作成いたしました。環境・社会・経済のひずみによる諸課題が国際的に叫ばれる中、持続可能な開発のための教育（ESD）や持続可能な開発目標（SDGs）への取組の重要性が注目を集めています。特に SDGs は、2030 年までに達成すべき世界共通の目標（約束）が掲げられており、全人類の“安全保障”に向けてこれまでとは異なる決意で臨むことが求められています。

現在、我が国では、首相官邸をはじめ各省庁やユネスコ国内委員会等が中心となって ESD や SDGs の普及・拡大が推進されており、全国の自治体や学校、市民組織、民間企業が地域の実情に応じた特色ある実践活動を行っています。特に教育（ESD）は、SDGs 達成の“鍵”と言われています。私たち“教育”に携わる国立施設においても、地域のナショナルセンターとしての使命的立場からその推進に向けて重要な役割を担っています。学校や市民団体等が行う ESD に対して、私たち青少年教育施設（社会教育施設）はどのような ESD が提案できるのか、学校や地域からは何が期待されているのか、といったことについて検討していく必要性を感じています。

そのような中、国立夜須高原青少年自然の家では、ESD・SDGs の推進を特色ある施設づくりの中心に位置付けると共に、特に学校の先生方にとって「このようなガイドがあったら、施設利用時においても ESD や SDGs の活動ができるのではないか」、あるいは「学校が行う ESD や SDGs の教育活動において、施設利用も活動計画の中に組み込み易くなるのではないか」と思料しました。そこで、施設の研修支援や立地環境を ESD や SDGs の視点から捉え直した結果、“持続可能な社会づくり”やその“担い手づくり”に十分貢献できることが見えてきました。すなわち、発想を少しだけ転換し、従来の活動の価値を再定義することで、施設での様々な教育活動（活動プログラム等）が SDGs に見られる世界共通の行動目標にも通じ、更に発展・充実した活動へと昇華させ得る可能性を秘めていることが判りました。

私たち国立夜須高原青少年自然の家は、その名の通り“自然環境に恵まれた”施設です。周囲は、里地里山の自然風景に包まれています。したがって、本ガイドはこの環境特性を活かすために「自然環境学習」をテーマにして例示・展開をしています。学校の年間教育活動における施設利用の検討の際や、施設での実際の活動企画において本ガイドが参考となり、夜須高原での「主体的・対話的で深い学び」へとつながる活動実践へと結びつくことを祈念しています。そして、本ガイドをとおして地球規模の諸問題を念頭に、地域や学校、家庭での日常生活における身近な課題解決の一步が踏み出せる一助になれば、私たちの喜びとするところです。

2020 年（令和 2 年）6 月 5 日
国立夜須高原青少年自然の家

1. ESDと学校教育

I ESDについて

ESD = Education for Sustainable Development
= 持続可能な開発のための教育

ESD について、私たちきずレンジャーが説明しながら、夜須高原でできる活動プログラムを提案していくよ！

やすこうげん
きずレンジャー



※きず（木酢）…夜須高原特産の柑橘類

ESDとは、「①人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する②現代社会における様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの③問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす、もって持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動です。」（『ESD 国内実施計画』H28 より抜粋）

※下線：夜須

分かりやすく説明すると、次のようになるよ！

① 人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう

= 「持続可能な開発 (Sustainable Development)」 の考え方。

今のままでは環境、経済、社会の様々な面で「持続不可能」となってしまう私たちの世界を、「持続可能な社会」に変えていく！

② 現代社会における様々な（地球規模の）問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで

= 持続不可能な社会の要因となる様々な地球規模の問題の存在を知り、それらの問題が自分たちの生活とつながっていることを理解した上で、自分でできることをやってみる！

③ 問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす

= 「取組」だけで終わらず、持続可能な社会づくりに必要な価値観や能力・態度の習得など、学習者の「変容」をもたらす！

< 文科省『ユネスコスクールで目指すSDGs 持続可能な開発のための教育』より抜粋 >

*①～③を踏まえ、同文献では愛称「今日よりいいアース（明日）への学び」と表現しています。

【ESDの歩み】

2002年、ヨハネスブルクサミットにおいて我が国がNGOと共同提案し、国連総会での採択を経て、ESD（持続可能な開発のための教育）が国際的に始まりました。10年の取組を経て、2015年からその後継となるGAP（下記）、そしてGAPが終了した2020年以降もESDの理念は世界的に受け継がれています。

2005年～2014年 「国連ESDの10年」

2015年～2019年 「国連グローバル・アクション・プログラム（GAP）」

GAPの提言をまとめると、ESDの今後の展開として学校教育が中心的役割を果たすことが明確に打ち出されているよ！



- ① ESDは、あらゆる教育・学習の側面に取り入れるべきである。
- ② 推進にあたっては、教員が重要な役割を果たすこと。
- ③ 推進にあたっては、若者の参加を促進することが重要である。
- ④ 実践の場として、地域が重要である。
- ⑤ 新しい時代に必要となる批判的思考や問題解決力等の資質・能力育成のため各機関・関係者が連携し、継続的に取り組む必要がある。

<文科省通達「26文科統括第156号」による>



「我が国における『持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）』実施計画」（ESD国内実施計画2016年）では、優先行動分野の推進の中に**体験活動**や**宿泊体験**についての記述があるよ！

○政策的支援（ESDに対する政策的支援）

体験活動を通じたESDの推進…ESDの視点を踏まえつつ、児童生徒の健全育成等を目的として、**宿泊体験活動**を行う学校等における取組を支援する。

また、各地域における世界遺産や伝統行事をはじめとする地域の風土や様々な活動、及び国際理解に関連するESDの取組や、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設を活用したESDの取組を推進する。

<持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議>

Ⅱ ESD と学習指導要領

平成 20・21 年改訂の学習指導要領において、持続可能な社会の構築の観点
が盛り込まれました。その前に改正された教育基本法とともに、ESD の考え方
に沿った教育が行われるようになりました。

平成 28 年、中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及
び特別支援学校の学習指導要領 等の改善及び必要な方策等について」にも、
「持続可能な開発のための教育（ESD）は次期学習指導要領改訂の全体におい
て基盤となる理念である」とされました。

この答申に基づき、平成 29・30 年に改訂された学習指導要領では、全体の
内容に係る前文及び総則において、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げら
れ、各教科においても関連する内容が盛り込まれました。

新学習指導要領を見ると、「人材育成」の観点から ESD が
表現されていることが分かるよね。



【前文】

これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一 人一人の児童（生徒）が、自
分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働し
ながら様々な社会的変 化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができ
るようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の
内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

【第 1 章 総則】

第 1 小学校（中学校）教育の基本と教育課程の役割 3 2 の（1）から（3）までに掲げる事項の実現
を図り、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童（生徒）に、生きる力を
育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、…総合的な学習 の時間及び特別活
動…の指導を通して、どのような資質・能力の育成を目指す のかを明確にしなが、教育活動の充実を図
るものとする。

<H29・30 小中学校新学習指導要領より抜粋>



2. SDGsとESD

♠ SDGsについて

SDGs = Sustainable Development Goals
= 持続可能な開発目標



SDGsとは、「2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。」（総務省HPより）



幅広い社会課題に対して、国際的に合意された具体的な取組のことだね。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



* SDGs 17の目標

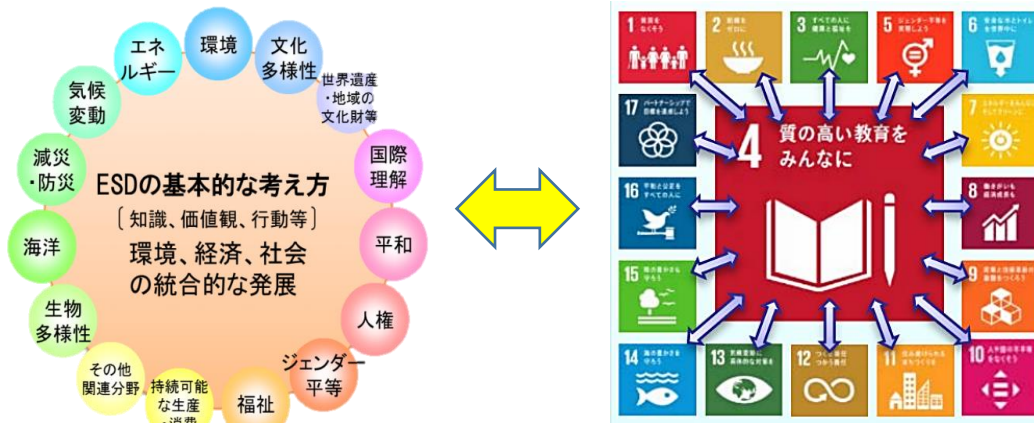
SDGs と ESD の関係について、日本ユネスコ国内委員会から、学校等で ESD を推進している方々へのメッセージの中に、次のような説明がされているよ！



教育は SDGs の目標 4 に位置付けられており、ESD は目標 4 中のターゲット 4.7 に記載されています。しかし、教育については、「教育が全ての SDGs の基礎」であり、「全ての SDGs が教育に期待」している、とも言われています。特に、ESD は持続可能な社会の担い手づくりを通じて、17 全ての目標の達成に貢献するものです。ですから、ESD をより一層推進することが、SDGs の達成に直接・間接につながっています。また、SDGs を、ESD で目指す目標が国際的に整理されたものとして捉えることもできます。

<http://www.esd-jpnatcom.mext.go.jp/about/pdf/message_01.pdf> 2020/6/1 参照

この点について、同委員会では下図のように全ての SDGs の中心に「教育」を据えて、ESD の新たな価値付けをしているよ！



* 『ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引 H30』日本ユネスコ国内委員会より抜粋



こうして見ると、ESD も SDGs も目指すところは一緒だね。教育が鍵であることから、次のような取組が期待されているよ！

ESD を推進すること自体が SDGs の達成に貢献することを踏まえ、SDGs が掲げる 17 の目標（課題）を、ESD の取組に取り入れ、今後の ESD の推進に役立てていただきたいと考えます。例えば、ESD の取組を SDGs の観点から見直すことを通じ、自分自身の ESD の活動に新たな意義や価値付けを行うことや、ESD の目標を明確化することが可能です。具体的なアプローチは、その学校・地域の課題や ESD の取組方により様々ですが、SDGs を見据えつつ、学校や地域で足元の課題解決を大事に、ESD を推進していただくことが重要です。

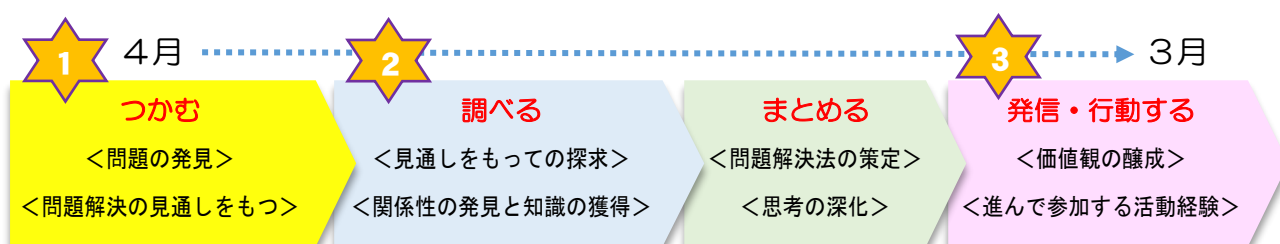
前掲メッセージ <http://www.esd-jpnatcom.mext.go.jp/about/pdf/message_01.pdf> 2020/6/1 参照

3. 施設で行う ESD・SDGs



施設が「自然の家」という特性から、ここではテーマを“環境学習”にして ESD の活動を例示していくよ。

I 学校の ESD に施設利用を位置づける場合



*参考『ESD 環境教育モデルプログラムガイドブック②』環境省 H26

《実施例》

- 1 夜須高原の自然に親しむ。／生物の多様性に気づく。
- 2 学校で見つけた課題を踏まえて、夜須高原の自然の中で調査・確認する。
- 3 夜須高原で環境保全活動を実践する。／朝・夕のつどい時の団体紹介で発表する。

例えば、新学年の早い時期なら、**実施例1**のように学校が行う ESD の導入段階として施設利用を位置づけて体験活動ができるよ。すでに問題の発見が終えている場合は、**実施例2**のように探求活動として施設周辺の自然観察や調査ができそうだよ。または、**実施例3**のように ESD 活動を広げる・伝える位置づけとして、施設利用時において実践活動や広報活動を行う取組も考えられるよ。



II 学校の ESD に施設の活動プログラムを活用する場合

施設では、様々な体験活動プログラムを利用者へ提供しています。(右表)

I の実施例のいずれかに、プログラムを取り入れて ESD の学びに援用することも可能です。施設の活動プログラムの活用方法については、後掲の「5. 施設プログラムと SDGs」で詳しく例示していますので、ご参照ください。



※施設ホームページ「野外活動プログラム」

Ⅲ 施設での活動全体を ESD でデザインする場合

1 日目 2 日目

つかむ

調べる

まとめる

発信・行動する

I の実施例は、学校での ESD 年間活動の中で施設利用を位置付けるというものでした。ここでは、学校での ESD 活動に関係なく、施設利用（宿泊活動）そのものを ESD の視点から捉え、ESD の一連の活動を入所時から退所時まで完了させるモデルの提案です。宿泊体験をとおして、“ESD の学び方”を学ぶ活動にもなります。

【実施例】… 想定される様々な活動例

つかむ	○夜須高原の自然にふれる（“なぜだろう？”を見つける）
	<ul style="list-style-type: none"> ・学校での活動と自然の中での活動の違いや住んでいる地域の自然と比べての類似点や相違点について、感想を述べ合う。 ・自然の中で見つけた（感じた）様々なこと（発見や疑問等）を出し合う。 ・自然に対してどのような姿勢・態度で臨むべきか（臨んだか）考える（ふりかえる）。 ⇒ルールやマナーの遵守、森の“住民”は人間だけか？
調べる	○発見や疑問等を個別焦点化・グループ化し、再度自然の中で調べる
	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の疑問等を基に、もう一度調査してみる。 ⇒新たな発見・気づき ・お互いの興味・関心に関係づけて、新たな調査班をつくって活動する。 ・活動班として疑問等を一つに絞り込み、班員で協力しながら探求する。
まとめる	○調べたことをまとめ、発表し合う（口頭発表・紙面発表等）
	<ul style="list-style-type: none"> ・校長先生や第三者（自然の家職員等）から感想や講評をもらう。 ・学校や地域に戻って、どのような活動につなげていきたいか話し合う。 ・「つかむ」場面で環境破壊に対する気づきがあれば、まとめた内容にも関連付ける。 ⇒環境保全に対する関心・行動につなげる
発信・行動する	○調べたことを伝える／課題を基に活動実践する
	<p>《環境保全》自然の中で清掃奉仕活動をする。</p> <p>《広報活動》 掲示物にして施設利用者に伝える。成果物を学校に戻って展示する。全校集会で報告する。</p> <p>施設のつどいで、各団体紹介の時に他団体に発表する。</p> <p>学校に戻っての「解散式」の中で、他学年等の学校待機職員や迎えに来た保護者へ伝える。</p> <p>《施設活動プログラム》</p> <p>「大根地山登山」「記念の森ハイキング」「ひるもりビンゴ」等を施設での最終プログラムに加え、自然の中でのマナー実践や落ちている小さなゴミを拾う美化活動をする。</p>

IV 施設での様々な生活を SDGs で意識化する場合

施設での生活は、普段の学校生活や家庭生活での成果を生かす機会になったり、見つめ直すきっかけにもなったりします。すなわち、日頃育んできた行動力を発揮する絶好のチャンスであり、個人や集団の姿をふりかえりながら新たな気づきを与えることもできます。そこで、様々な暮らしの場面にも直結している SDGs を、施設で体験する教育的な機会として改めて捉え直してみたいかがでしょうか。施設は、SDGs の“学びの宝庫”であり、**生活そのものが SDGs** です。

下表は、『夜須高原せいかつ7つのアクションガイド』です。入所オリエンテーションの際、施設からのお願いとして伝えていたことを、SDGs の視点から再構成してみました。前述したⅠ～Ⅲと並行してこの生活アクションを実践してもいいですし、Ⅰ～Ⅲに関係なく集団宿泊生活における生徒指導の一環として活用していただくことも可能です。

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに

1 使い終わった部屋の電気を消そう！
2 窓を開けたり扇風機を使ったりして
冷房電力を節約！（熱中症に注意しながら…）

3 水を大切に！
（限りある資源です。水を出しすぎに注意しよう）

6 安全な水とトイレ
を世界中に

15 陸の豊かさも
守ろう

4 自然を大切に！
（活動場所でのゴミ拾いをしよう）
※夜須高原の森や川の住民は、人間だけではありません。

夜 **高**
須 **原**
せいかつ **7つのアクション** **ガイド**
SDGs

5 みんなで清掃しゴミの分別を！
（ペットボトルは、中を洗ってリサイクルしやすいように）

6 分量を考えて食べ残し（ゴミ）を減らそう！
（食品ロスや焼却による CO2 排出について考えよう）

12 つくる責任
つかう責任

5 ジェンダー平等を
実現しよう

7 差別のない仲間づくりをしよう！
（女だから、男だからと決めつけず、
お互いに尊重し合って仲良く活動しよう）

10 人や国の不平等を
なくそう

YASUKOGEN
SDGs project

みなさんのおうちや学校、
地域でもやっぺいこう！

16 平和と公正を
すべての人に

V 活動プログラムの中にSDGsの視点を入れる場合

学校の教育活動計画や施設の利用目的によってⅠ～Ⅲでの実施が難しい場合は、利用期間のプログラムの一部にSDGsの視点を盛り込んだ活動を行って、その要素を体験することもできるよ！



プログラムの1コマで…

SDGsの目標を念頭にして体験活動を企画・実施する。出発前に活動の目的を伝え、意識化を図る。

テーマを設定する

体験する

ふりかえる

活動後に、様々な感想や気づきを出し合い、個人や集団の考えを深める。今後自身の興味・関心や集団としての活動につなげていきたいかを全員で確認する。(SDGsの目標につながっていることを伝え、意欲付ける。)

Ⅰは、学校が行っているESDの中で施設利用をする時に提案できる学習・活動を例示しました。Ⅱは、その利用時にESD活動の一部を施設の活動プログラムで援用する提案でした。Ⅲは、施設における活動(生活)の全てをESDでデザインし、ESDの学びを完結させる提案でした。

しかし、実際の施設利用においては、純粋に“集団づくり”のための利用(例えば、最上級生になるための“リーダー研修”的な利用)であったり、日頃体験できない自然を思い切り満喫させるための“自然体験教室”的な利用であったりして、ESDの実践までは難しい場合もあります。

そこで、学校が行う活動プログラムの一つに、SDGsの視点を入れた活動だけでも取り入れてみてはいかがでしょうか。Ⅱで触れたように、施設では様々な体験ができる活動プログラムが提供されており、これら一つ一つをSDGsと結び付けて実施することも可能です。関連付けられるSDGsについては、後掲「5.施設プログラムとSDGs」に紹介していますので、ご参照ください。

例えば、SDGs「15 陸の豊かさを守ろう」をテーマにして、施設の活動プログラム「フィールドビンゴ」(後掲)を援用します。子供たちには、この活動を通じて「自然の豊かさ(多様性)」を同時に感じ取るよう意識化してもらい実施します。活動後は、どのような“豊かさ”を見つけたのか発表し合い、未来の姿を想像しつつ日常生活においてその豊かさが保全のされるために個人としてどのように行動したり、みんなと活動できるかを考えたりしていきます。



4. ESD プログラム化の実際

施設利用で ESD を踏まえたプログラムを考案したり、従来の教育活動を ESD として捉え直したりしていく際のポイントについて紹介するよ。



I 学校・施設で ESD を始める手順例



POINT 1 目標の設定

一番に大切なことは、学習活動の目標の設定です。
活動目標に「持続可能な社会づくり」の視点が含まれるように設定します。

POINT 2 やり方の見直し

目標の達成と同様に大切なのは、その「プロセス」＝学びの在り方です。
誰もが学習者であること、文化や意見が違うこと、互いに関わり学び合うことなどを尊重したやり方になっているかを見直します。

POINT 3 つながりのもち方の見直し

ESD は、モノ・人・事柄の「つながり」を、より持続可能な在り方に再構築していく試みでもあります。学びがどう未来に繋がるのか、誰と一緒に学ぶのか、何と何を関連付けて学ぶのか、といった「つながり」が意識されているかを見直します。

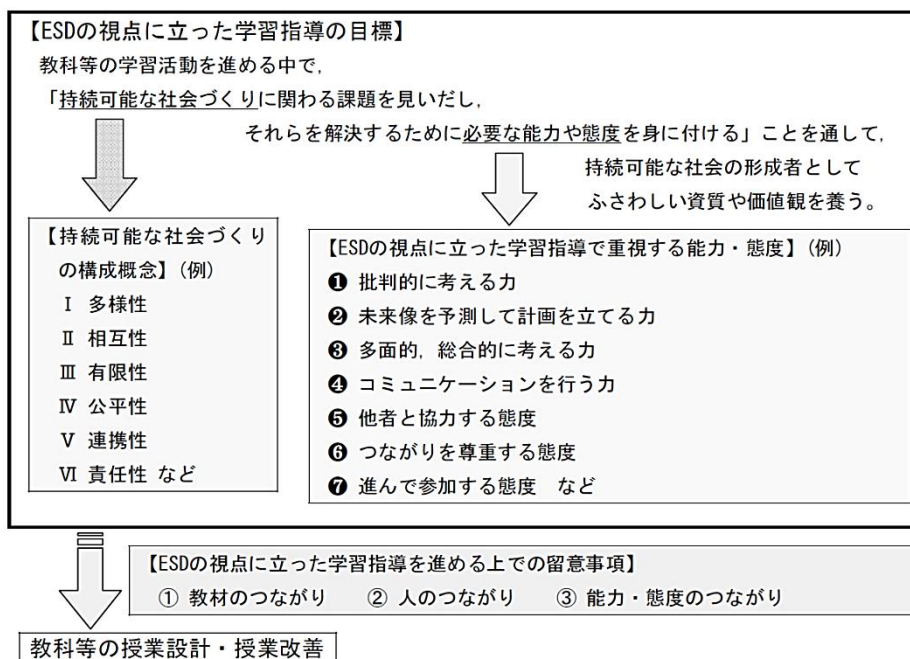
* 『ESD ってなんだ? Vol. 2 「学校で ESD をすすめるために」』岡山市教育委員会

ESD を展開するにあたっては、何か新しい活動を始めなくてはいけないというものではありません。すでに学校独自で ESD に通じるような活動、例えば「総合的な学習の時間」等で取り組んでいることと思われます。それを ESD の視点から捉え直して（上図）、新たな教育的価値を付加していくとよいでしょう。そして、この見直しの過程において施設を利用した際の学習も位置付けてみると、従来よりもさらに充実した施設利用に生まれ変わるかもしれません。または、学校での ESD 活動と並行して、施設で ESD の学び方を学ぶ活動として ESD を意識したプログラムを実施することも可能ではないかと思われます。（前章「3. 施設で行う ESD」）



ESD の学習指導過程を構想し、展開をするために必要な枠組みについて、次のページのような図説があるよ！





* 『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕』 国立教育政策研究所 H24

ここからは、学習の課題設定に必要な ESD の要素である「構成概念」、ESD の視点に立った学習指導で重視する「能力・態度」を上記の最終報告書および『ESD 環境教育モデルプログラムガイドブック②』環境省 H26 から引用して、紹介するよ！



【ESD の6つの構成概念(例)】

1 多様性 いろいろある		自然・文化・社会・経済は、それぞれの形成過程で様々な様相を見せ、多種多様な事物・現象が存在しています。そうした生態学的・文化的・社会的・経済的な多様性を尊重するとともに、自然・文化・社会・経済に関わる事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切です。
2 相互性 かかわり あっている		自然・文化・社会・経済は、それぞれが互いに働き掛け合うシステムであり、それらの中では物質やエネルギー等が 移動・消費されたり循環したりしています。人は、そうしたシステムとのつながりを持ち、さらにその中で人と人とが互いに関わりあっていることを認識することが大切です。
3 有限性 限りがある		自然・文化・社会・経済を成り立たせている環境要因や資源（物質やエネルギー）は有限です。このような有限の物質やエネルギーを将来世代のために有効に使用していくことが求められます。また、有限の資源に支えられている社会の発展には限界があることを認識することも大切です。
4 公平性 一人一人 大切に		持続可能な社会の基盤は、一人一人の良好な生活や健康が、保証・維持・増進されることです。そのためには、人権や生命が尊重され、他者を犠牲にすることなく、権利の保障や恩恵の享受が公平であることが必要で、これらは地域 や国を超え、世代を渡って保持されることが大切です。
5 連携性 力を合わせて		持続可能な社会の構築・維持は、多様な主体の連携・協力がなくては実現しません。意見の異なる場合や利害の対立する場合などにおいても、その状況にしたがって順応したり、寛容な態度で調和を図ったりしながら、互いに協力して問題を解決していくことが大切です。
6 責任性 責任を持って		持続可能な社会を構築するためには、一人一人がその責任と義務を自覚し、他人任せにするのではなく、自ら進んで行動することが必要です。そのためには、現状を合理的・客観的に把握した上で意思決定し、望ましい将来像に対する責任あるビジョンをもつことが大切です。

【ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)】

批判

①批判的に考える力

- ・合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に施行・判断する力

<具体例>

- 他者の意見や情報を、よく検討・理解して採り入れる ⇒×得られたデータや考え方を鵜呑みにする
- 積極的・発展的に、よりよい解決策を考える ⇒×消極的・悲観的に考え、すぐに諦めて、答えだけを得ようとする

未来

②未来像を予測して計画を立てる力

- ・過去や現在に基づき、あるべき未来像(ビジョン)を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、ものごとを計画する力

<具体例>

- 見通しや目的意識を持って計画を立てる ⇒×無計画にものごとを進めたり、その場しのぎをしたりする
- 他者がどのように受け取るかを想像しながら計画を立てる ⇒×独りよがりにものごとを進めてしまう

多面

③多面的、総合的に考える力

- ・人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり(システム)を理解し、それらを多面的、総合的に考える力

<具体例>

- 廃棄物も見方によっては資源になると捉えることができる ⇒×役に立たないものは不要だと考える
- 様々なものごとを関連付けて考える ⇒×まとまりがなく、断片的な見方をする

伝達

④コミュニケーションを行う力

- ・自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力

<具体例>

- 自分の考えをまとめて簡潔に伝えることができる ⇒×他者の意見の欠点ばかりを指摘し、自分の考えを言わない
- 自分の考えに、他者の意見を取り入れる ⇒×他者の意見を聞こうとしない

協力

⑤他者と協力する態度

- ・他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度

<具体例>

- 自分の考えをまとめて簡潔に伝えることができる ⇒×他者の意見の欠点ばかりを指摘し、自分の考えを言わない
- 自分の考えに、他者の意見を取り入れる ⇒×他者の意見を聞こうとしない

関連

⑥つながりを尊重する態度

- ・人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心をもち、それらを尊重し大切にしようとする態度

<具体例>

- 自分が様々なものごととつながっていることに関心をもち ⇒×自分に直接関係のあることしか関心がない
- いろいろなもののお陰で自分がいることを実感する ⇒×自分は一人で生きていると思いつむ

参加

⑦進んで参加する態度

- ・集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を理解するとともに、ものごとに主体的に参加しようとする態度

<具体例>

- 自分の言ったことに責任をもち、約束を守る ⇒×無責任な行動ばかりで、きまりを守らない
- 進んで他者のために行動する ⇒×自分が得をすることしかしない

* 『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究〔最終報告書〕』国立教育政策研究所 H24



【環境学習をテーマにした場合の視点(例)】

■ 資源の循環

我々が日常生活の中で使う資源は消費によって枯渇し、大量のごみとなって環境悪化の大きな原因となっている。廃棄物の削減、製品の再利用、さらに資源の再生利用のための資源の循環の視点が大切である。

■ 自然や生命の尊重

地球上の生物は、数十億年に及ぶ進化の過程を経て多様な姿や生活様式を見せている。これら生命の誕生、生物の成長の仕組みを知り、自他の生命を尊重し、自然への畏敬の念を育む視点が大切である。

■ 生態系の保全

植物や動物から微生物に至るまで、地球上の生物はそれらを取り巻く土壌、水、大気、太陽光などの非生物的環境との間の相互関係からなる自然の生態系を構築している。生態系は微妙なバランスの上に成り立っており、その保全に寄与することを通して、自然と調和して生きようとする視点が大切である。

■ 異文化の理解

地球上には、多様な文化や生活、価値観をもつ人々が存在している。これらの多様な文化や生活、価値観は長い歴史の中で形作られてきたものであり、それらを尊重し、平和で豊かな社会を構築しようとする視点が大切である。

■ 共生社会の実現

異文化理解や社会参画により、一人一人の個性が異なることを知るとともに、環境問題により多くの影響を及ぼすことがあることを理解し、共に生きようとする共生社会の実現を目指す視点が大切である。

■ 資源の有限性

資源は人間生活のために必要不可欠なものである。しかし、資源は基本的に有限であるため、大切に使うとともに環境負荷を減らし、循環型社会の構築を目指す視点が大切である。

■ エネルギーの利用

我々の生活は、石油などの化石燃料や太陽光、風力のような自然エネルギーなどの開発、利用によって成り立っている。しかし、人類によるこれらのエネルギーの使用は地球温暖化などの地球環境問題と密接に関係している。このことをよく理解し、エネルギーの適切な利用の仕方について考える視点が大切である。

■ 生活様式の見直し

エネルギーの利用に対応した形で、環境に配慮した生活様式を考えていく視点が大切である。環境の状態を調査・評価したり、管理したりすることによって、環境とバランスの取れた生活をする視点が大切である。

* 『ESD 環境教育モデルプログラムガイドブック②』 環境省 H26





もちろん、ESD を取り入れた活動プログラムや授業を行うとき、これら6つの構成概念や能力・態度のすべてを盛り込む必要はありません。ねらいや目的によって重視するものが違います。

また、これらの概念や能力・態度だけに限定されるものでもありません。例示として参考にしてくださいね。

Ⅱ ESD のプログラム化へ



例えば、能力・態度「①批判的に考える力」について、前掲『環境教育指導資料』では「環境に関する問題は、正解が一つということはない。そこで、自分の考えを証拠や理由に立脚しながら主張したり、他者の考えを認識し、多様な観点からその妥当性や信頼性を吟味したりすることなどにより、批判的に捉え、自分の考えを改善するといった批判的に思考する能力が必要となる。」と説明しています。

これは、例示した構成概念「1 多様性」「2 相互性」「4 公平性」を念頭にした活動をしていく際に必要となる“多角的・多面的に物事を捉えていく姿勢・態度“にもなります。こうした関連性（つながり）を考慮すると、実施予定の（あるいは既存の）体験活動がESDを踏まえた学習・活動として十分に組み立てられる骨格が見えてきます。これらは、ESDを意識せずとも従来の教育活動で日頃から組み立てられ、展開されていたかもしれません。したがって、ESDを行うにおいては新たな学習・活動を準備する必要はなく（もちろん、新たに教材として開発しても構いませんが）、既存のものを捉え直すことによってESDとしての学習価値も加えることができます。

前章「3. 施設で行うESD・SDGs」および次章「5. 施設プログラムとSDGs」と合せて、施設利用をESDの視点から価値付けてみてはいかがでしょうか。学校が行う教育目標の達成や持続可能な社会を担う子供たちの育成に向けて、私たち施設もその一助になれば幸いです。

**さあ、夜須高原青少年自然の家と
共にはじめましょう！**



【参考】

◆授業者に必要な役割

色々な文化や価値観をもつ人々が合わさることで新しい価値観が生まれるのが、ESDの1つのポイントです。教材や人とのつながりを想像しながら授業をデザインできる**コーディネーター**、今そこにある問題の面白さ、課題に気づかせるような**インタープリター**、そして子どもの活動を引き出し、うまく実現できるように協力する**ファシリテーター**という役割を担う主体が必要となります。

< 『ESD 環境教育モデルプログラムガイドブック②』 から抜粋 >

【ESDの視点に立った学習指導の留意事項】

『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕』（国立教育政策研究所 H24）によると、ESDの視点に立った学習指導を進める上での留意事項として、①**教材のつながり**、②**人のつながり**、③**能力・態度のつながり**、が挙げられています。（「4. ESD プログラム化の実際」に図説あり）

「①**教材のつながり**」については、「持続可能な社会づくりに関わる課題に対して多面的、総合的に探究していくことが求められる。そのため、ある教科等で取り上げる教材（事物、現象、題材、課題など）が、他の教科等や他の学年・学校種で扱われる教材ともつながっていること」が大切であるとされています。

環境や自然をテーマにして学校での教育活動だけでなく、施設での活動も射程に入れた場合、教材のつながりは以下の教科等（小学校例）で関連が見出せます。

※夜須調べによる

関連する教科	学年・内容（学習指導要領）
社会科	第4学年 (2) 人々の健康や生活環境を支える事業 第5学年 (5) 我が国の国土の自然環境と国民生活との関連 第6学年 (3) グローバル化する世界と日本の役割
理科	第4学年 (2) 季節と生物 第5学年 (1) 植物の発芽、成長、結実 第6学年 (3) 生物と環境
家庭科	C 消費生活・環境 (2) 環境に配慮した生活
特別活動	2 学校行事 (4) 遠足・集団宿泊的行事
総合的な学習の時間	第3節 各学校が定める内容 現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題 環境：身近な自然環境とそこに起きている環境問題

「②**人のつながり**」では、「学習の過程において、自分と他者とが時間と場を共有しながら互いに学び合い、つながり合うことが大切である。そうした過程の中で、他者との対話やコミュニケーションの大切さを感じ取ったり、他者の活動に共感したりしながら、それらに必要な能力や態度を身に付け、さらに新たな考えや行動を生み出していくことになる。そのためには、児童生徒同士の「つながり」を取り入れた参加体験型の学習を展開したり、地域（身近な地域だけでなく、国内や海外、とりわけ発展途上国も含めて）との「つながり」を図りながら工夫したりすることが必要としています。これはすなわち、夜須高原という自然豊かな地域での活動そのものであるといえます。

「③**能力・態度のつながり**」では、「関心を高めたり、認識を深めたりするだけでなく、身に付けた能力や態度を行動に移していくことや、実生活・実社会における実践につなげていくことが大切である。そのためには<中略>現実的な問題解決との「つながり」になるように取り組んだりするなどの工夫をすることが必要である。」としています。



夜須高原からの提案！



ESD は、現世代だけでなく将来世代の人々の暮らしも思いやるハートフルな教育です。夜須高原での環境学習の場合、「この自然の豊かさがずっと永く続いて欲しい…」という願いや感想がよく聞かれますが、今、自然の中で活動が満喫できているのは、**過去世代の方々の自然に対する姿勢のお陰でもあります。**

そのことにも思いを寄せ（気づかせ）ながら、**将来世代のことを考える工夫をしてみたいはかがでしょうか。**

Ⅲ 施設にある活動プログラムでの実施例



では、以上のことを参考にして施設での ESD 活動を組み立てていきましょう。

例えば、活動の目標を「自然環境の**多様性を知る**ことにより、**好奇心や探究心を育む**」「自然体験をとおして**保全活動への関心をもつ**」の2つ設定した場合、ESD の視点として「ESD の要素」（下表）の「多様性」「責任性」が該当しそうです。



下表の6つの要素すべてを、本プログラムに当てはめて実施する必要はありません。重視するものをピックアップしてください。
内容例については、「施設の活動プログラム①」（後述）の活動内容や性格を踏まえて、ここでは例示しています。

本プログラムで想定される ESD の要素（構成概念）に対する内容例			
人を取り巻く環境に関する概念		人の意志や行動に関する概念	
多様性	自然に親しみ、自然の中では様々な生き物が生息し自然界が成り立っていることに気づく。	公平性	誰もが自然を享受できるようにするために、自然に対してどのように行動すればよいか考える。
相互性	豊かな自然がなかった場合、私たちの暮らしはどうなっているかを思いやる。生き物と人間が共に暮らしていることに気づく。	連携性	自然を大切にしている活動や行動をしている人・グループがあって自然が守られていることを考える。
有限性	自然が損なわれると、元通りには戻らない場合や再生するまでに時間がかかることを知る。	責任性	豊かな自然を守るために、自分やみんなでできることはないかを考える。（普段の生活でできることはないか。）

次に、目標達成に向けて育みたい力・態度を「多様性を知る」「好奇心や探究心」「保全活動への関心」に照らした場合、次表の例示を参考にすると「①批判的に考える力」「③多面的、総合的に考える力」「⑥つながりを尊重する態度」がうまく当てはまりそうです。

次表の「能力・態度」も、施設での活動を考慮して例示しています。こちらの項目も、国立教育政策研究所の前掲報告書に紹介されている例示を基にして提案しています。

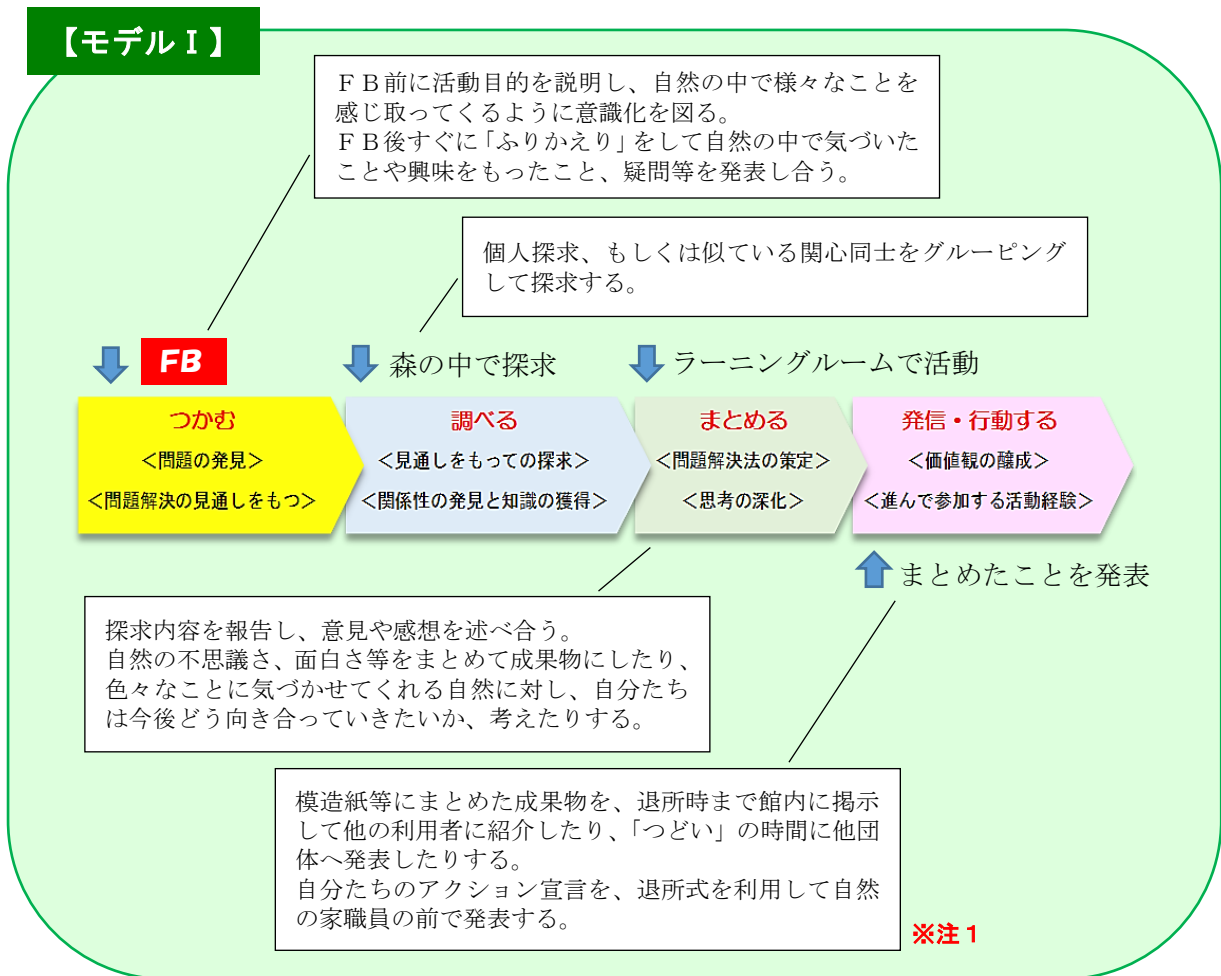


本プログラムで想定される ESD の能力・態度と内容例	
批判	①批判的に考える力 ○自然の中で気づいたことや疑問に感じたことについて、なぜそうなっているのかを考えたり調べたりして検討することができる。 ○自分は自然とどう向き合ってきたか、これまでに自然を痛めてしまうような行為はなかったか省察する。
	②未来像を予測して計画を立てる ○自分たちの考えや行為が今のまま続いた場合、どのような自然や社会になってしまうのか思いやることができる。 ○夜須高原の自然や自分たちが住む身近な自然が、将来どうあって欲しいかを現状を踏まえて想像することができる。
多面	③多面的、総合的に考える力 ○木や葉がなぜこの環境で生息しているのか、なぜそのような姿・形になっているのか自然の様々な状況から推測する。 ○森の中に通り道（人道）をつくるのは必要かどうか、様々な人・もの・ことを切り口にして考えてみるができる。
	④コミュニケーションを行う力 ○自分が感じた自然の豊かさや不思議さ、自然破壊の様子についてみんなに伝え、他者の感想や意見をもとにさらに深めていくことができる。 ○お互いに考えや意見を述べ合い、課題をみんなで解決していくことができる。
協力	⑤他者と協力する態度 ○豊かな自然を守るために、みんなのできることはないかを考える。（普段の生活でできることはないか。） ○自然の中でお互いに安全に気を配り、支え合ってグループ行動ができる。
	⑥つながりを尊重する態度 ○自然を大事にすることによって、どのような人々にどんな恩恵をもたらすことができるのか考えてみる。 ○自分の周りで環境を大切にしている人や活動、地域行事等がないか関連付けて考えることができる。
参加	⑦進んで参加する態度 ○自然保護に対し、自分にできることはないかを考え、行動することができる。 ○所属する集団以外の人々に自然保護や環境問題を伝え、一緒に考えたり行動したりできる。

そして、これらを基に学習場面を考えながら施設の活動プログラムを選んでいきます。後述の「施設の活動プログラム①」に挙げられている様々な活動の中から、ここでは一番人気の「フィールドビンゴ」を取り入れてみることにします。つまり、前章「3. 施設で行う ESD」で紹介した「II 学校が行う ESD に施設の活動プログラムを活用する場合」の具体化になります。

フィールドビンゴ（以下、FB）は、コース図を頼りに森の中をグループで歩き、途中にあるチェックポイントで問題用紙にある風景写真と同じ風景を探したり、設問を解いたりして楽しみます。活動をとおして自然にふれることができ、グループ内での役割分担やコミュニケーションが深まり、リーダー性や団結力の向上が期待できる体験活動プログラムです。

ESD のテーブルに則って実施する場合は、FB をどの場面で組み込むかが次の作業になります。「生物多様性を知る」「自然の中で好奇心や探究心を育む」ためのスタートアップとしてFB を活用するならば、下図（モデルⅠ）の学習過程「つかむ」段階に位置付けられそうです。

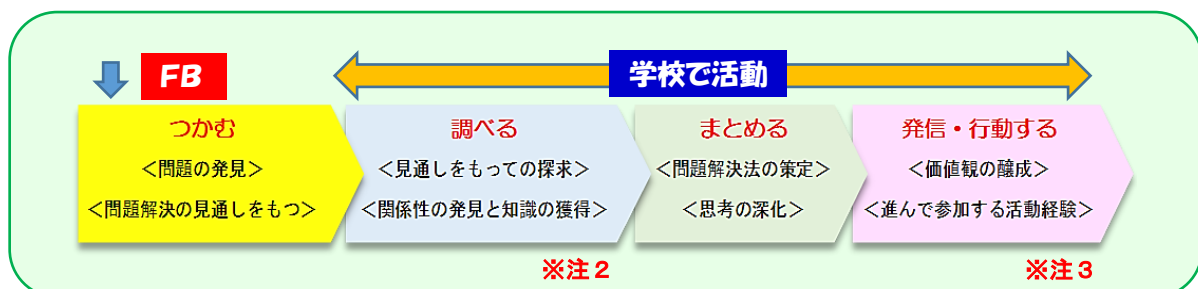


注1 館内で掲示発表を希望される場合や「つどい」での団体紹介の時間を利用して発表される場合は、事前にご相談ください。当日の団体数等によっては、十分な時間が確保できないこともあります。



その他、FB活用のモデルケースをいくつか紹介しますので、参考にしてください。

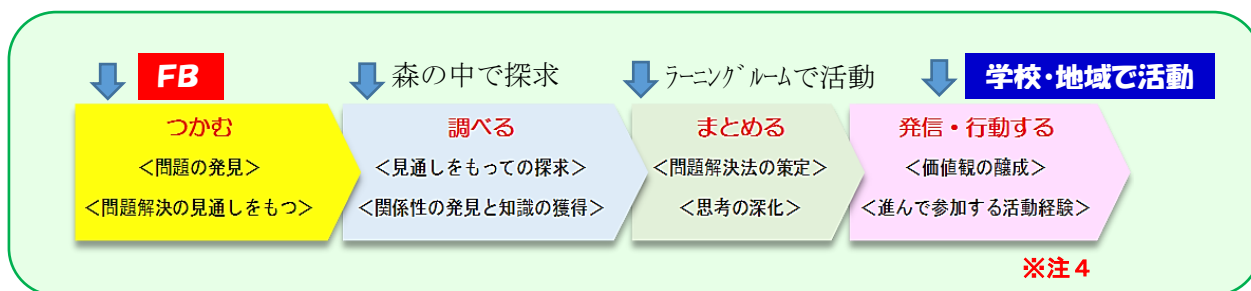
【モデルⅡ】 … 導入的な活動を施設で行い、その後の活動は学校に戻って展開



注2 施設周辺の自然と住んでいる地域の自然とを比較するのも、「①教材のつながり」になります。

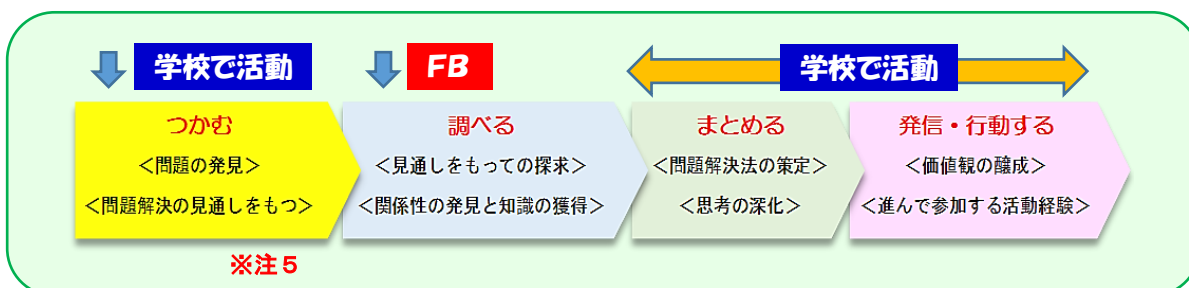
注3 地域の方々と環境保全活動（美化活動等）と結びつくと、「②人のつながり」になります。

【モデルⅢ】 … 活動の「まとめ」までを施設で行い、その後の実践は学校・地域で展開



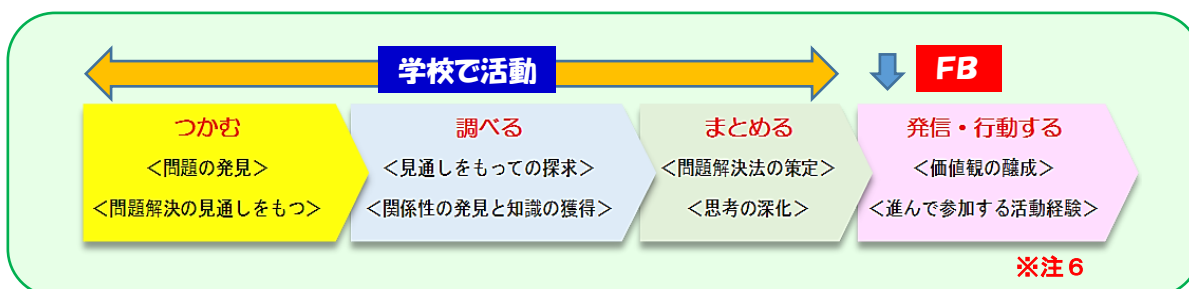
注4 施設で得られた知見を基に、学校・地域での活動に発展させていきます。施設での成果を退所後すぐに生かしたい場合は、例えばそのまま学校に戻った際に「解散式」で迎えた保護者や学校で待機していた教職員に伝える場面を設ける等、工夫ができそうです。または、直近の全校集会で他学年集団に成果を発表することも「②人のつながり」になります。こうした活動により、SDGs が目指す「社会参加・変革」への一歩に結びつくことにもなります。

【モデルⅣ】 … 事前学習を学校でした後、施設で探求活動のみを実施



注5 事前学習により生じた個人あるいはグループの課題を、施設での活動に生かしていきます。

【モデルⅤ】 … (学習成果発表の場として) 最終的な活動を施設で実施



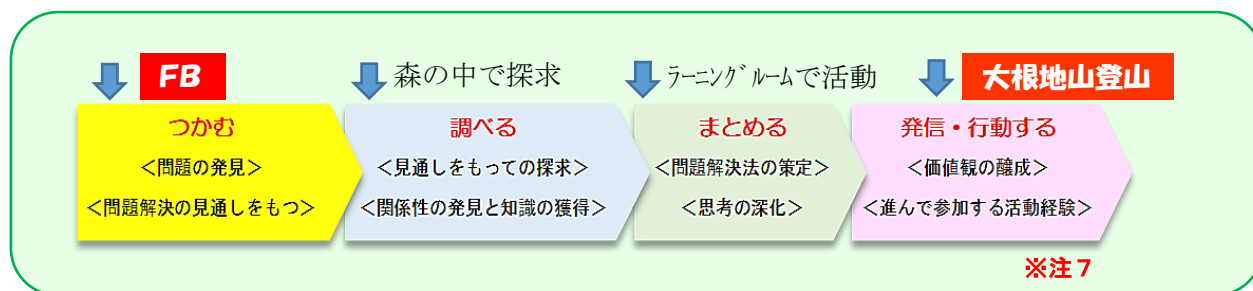
注6 “自然環境の保全”活動を実践する機会としての施設利用も可能です。例えば、FBを楽しみながらゴミ拾い等の清掃活動を行います。回収したゴミの量が多ければ、それだけ自然界にふさわしくないものがあり環境が汚染されていることを考える機会になります。少なければ、森を利用する人々の意識が高いことや環境を守るボランティア活動者の存在に気づくかもしれません。大型ゴミが不法投棄された場面に遭遇すれば、SDGs の目標 12「つくる責任つかう責任」を考える機会にもなります。

または、学校で行ってきたESDの学びの成果を、施設で行われる「つどい」等で学校紹介も兼ねて他団体に伝える活動をする 것도できそうです。自分たち以外の人々や団体に伝える活動をととして、社会参加のステップアップにもつながることが期待できます。

学校での事前学習を経て施設で活動をする、自然環境に対する子供たちの行動の意識化が図られ、“参加の姿”や“行動変容”が確認できる機会にもなります。



【モデルⅥ】 … 最初と最後に施設の活動プログラムを実施



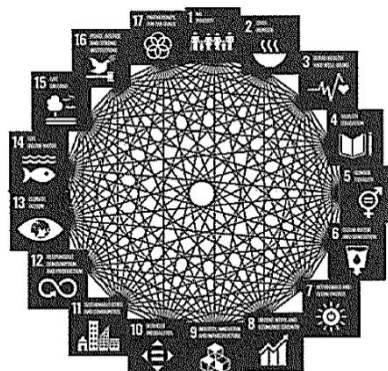
注7 モデルⅠの活動追加例として、上表「発信・行動する」場面に「夜須高原で体験できる活動プログラム①」の中から「大根地山登山」を組み入れます。その直前の「まとめる」段階において、自然環境保全の必要性が集団全体で確認できれば、そのアクションの一つとして登山を楽しみながら、同時に“清掃登山”のボランティア活動として価値付けることも可能になります。

【参考】 … ESDとSDGsの学びの違いについて

日本ユネスコ国内委員会は「今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題があります。ESDとは、これら現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む (think globally, act locally) ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。」と説明しています。

「SDGsの学び」については、『学校3.0×SDGs』（諏訪哲郎ほか編著 株式会社 21）の中でESDの学びと「看過できない違いがある」ことが強調されています。SDGsの学びは「17の目標が相互に関連し合っており、それらのいずれもが「地球の生命維持システム」の構成と深く結びついていること」の理解が不可欠であるとし、ESD推進者がよく活用している「教育」を中央に置いた1対1での相関図（左下）では、世界の持続可能性をすくうことにはならないと論じています。

ただし、「世界の持続可能性をSDGsの網で「すくう」という姿で展開されていくことが望ましい」（右下図）としつつも、「つながりのわかりやすい二つの事柄を取り上げて、どこでどうつながっているのかを発見させる学びから始めるのがよい」と補足しています。そして、「全体のつながりの中で問題を捉える思考」は、「ESDの学びの不十分な部分を補う可能性を持っている」と説明しています。



5. 施設プログラムとSDGs

自然の家にある活動プログラムとSDGsの関係性について例示するよ。活動に取り入れる際、どのような選択の可能性が見出せるかイメージしてみてください。



♣ 施設で体験できるプログラム

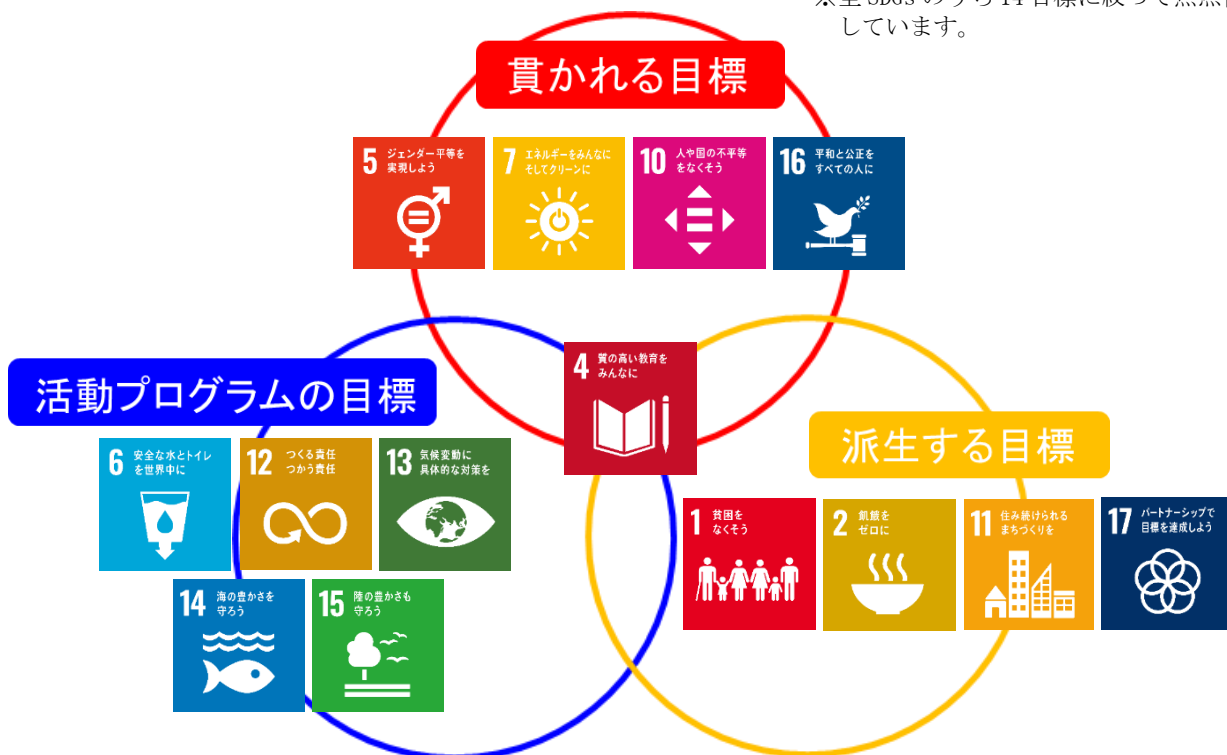
施設では、様々な活動プログラムが提供されていて体験ができます。これらプログラムを前々章「3. 施設で行うESD・SDGs」で例示しましたように、学校団体が考えている施設利用の目的に沿って取り込んでみてはいかがでしょうか。

実は、施設の入所時から退所後まで様々な活動をESDの視点から意識して見ていくと、一つ一つの行動や活動がSDGsの目標とつながっていることが分かります。例えば、「3. 施設で行うESD・SDGs」のIVで紹介している『夜須高原SDGsせいかつ7つのアクションガイド』を見れば、施設での生活の様々な場面がSDGsと密接な関係であることに気づくはずですよ。

施設で体験できる活動プログラムも、同様に活動内容に応じたSDGsを見出すことができます。まずは、体験活動における全体像（下図）から活動プログラムとSDGsを見ていきましょう。

◇ 夜須高原での体験活動におけるSDGsの全体像〔夜須高原 ver.〕

※全SDGsのうち14目標に絞って焦点化しています。



施設で体験活動を実施する際、想定できる SDGs を 14 目標に絞り込みました。そして、これらを 3 つに分類し整理（貫かれる目標・活動プログラムの目標・派生する目標）しました。


<p>■ 貫かれる目標 活動や生活全般での集団・グループ・個人として踏まえておくべき行動目標</p> <p>■ 活動プログラムの目標 施設にある活動プログラムの特性に応じた活動目標</p> <p>■ 派生する目標 上記 2 つの目標によって将来的につながりが期待できる未来目標</p>

「貫かれる目標」は、施設利用者のあらゆる場面で共有すべき目標になります。前述した『夜須高原 SDGs せいかつ 7 つのアクションガイド』と併せて、実践して欲しい施設としての願いでもあります。

「活動プログラムの目標」は、施設にある活動プログラムが持ち合わせている特色を踏まえて、想定される目標です。例えば、後述している「夜須高原で体験できる活動プログラム①」は、主にフィールド活動系のプログラムです。同②は野外調理・創作活動系、同③は防災・減災学習系のプログラムです。これら①～③は、活動プログラムの特色を踏まえてグルーピングされており、各々に適当と考えられる SDGs を施設から提案しています。

「派生する目標」は、施設で体験した上記 2 つの目標を通じて、更に連鎖的・発展的な学びが期待されるであろうと思われる目標です。複雑に絡み合った SDGs に対し、夜須高原での学びが更なる学びを生む好循環が期待されています。前章「4. ESD プログラム化の実際」の「学習指導の留意事項」で説明しました「①教材のつながり」「②人のつながり」「③能力・態度のつながり」とも密接に関係してくる重要な目標になります。

この 3 分類に通底する目標として SDGs 「4. 質の高い教育をみんなに」を捉え、全体の中心にしています。（実は、ESD については「SDGs ターゲット」の中にも明記されています。 下表 4.7）

該当する SDGs ターゲット	
 <p>4 質の高い教育をみんなに</p>	<p>【目標 4】 すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する。</p>
	<p>4.7 2030 年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。</p> <p>4.a 子供、障害及びジェンダーに配慮した教育施設を構築・改良し、全ての人々に安全で非暴力的、包摂的、効果的な学習環境を提供できるようにする。</p>


※SDGs には、全 17 目標に対してそれぞれターゲット（全 169）が設けられています。

では、それぞれの SDGs ターゲットを確認していきましょう。



① 貫かれる目標

活動時(施設での生活全般も含む)においては、あらゆる形態での行動や学習が想定されます。それらの場面で平等や公正が押さえられていることは大変重要です。例えば、個の立場や意見が尊重されているか、取り残されている者はいないか等、民主的で包摂的な風土になります。

施設で該当する SDGs ターゲット	
 <p>5 ジェンダー平等を 実現しよう</p>	<p>【目標5】 ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワメントを図る。</p>
	<p>5.1 あらゆる場所における全ての女性及び女児に対するあらゆる形態の差別を撤廃する。</p> <p>5.5 政治、経済、公共分野でのあらゆるレベルの意思決定において、完全かつ効果的な女性の参画及び平等なリーダーシップの機会を確保する。</p>
 <p>7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに</p>	<p>【目標7】 すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する。</p>
	<p>7.3 2030年までに、世界全体のエネルギー効率の改善率を倍増させる。</p>
 <p>10 人や国の不平等を なくそう</p>	<p>【目標10】 国内および国家間の格差を是正する。</p>
	<p>10.2 2030年までに、年齢、性別、障害、人種、民族、出自、宗教、あるいは経済的地位その他の状況に関わりなく、すべての人々の能力強化及び社会的、経済的及び政治的な包含を促進する。</p>
 <p>16 平和と公正を すべての人に</p>	<p>【目標16】 持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。</p>
	<p>16.7 あらゆるレベルにおいて、対応的、包摂的、参加型及び代表的な意思決定を確保する。</p>

② 活動プログラムの目標

施設で体験できる活動プログラムには、以下の5つのSDGsと結びつけて実施ができそうです。自然体験を“無目的”的に純粋に楽しむことも可能ですが、その体験が実はSDGsの目標にもつながっていることも考える機会として、活動を価値付けることもできます。(施設「活動プログラム」とSDGsの関係については、後述の説明を参考にしてください。)

なお、ご承知のようにSDGsの目標はそれぞれにつながりがあり、お互いに複雑に絡み合っていますので、一つ一つの活動プログラムに対してSDGsを明確に当てはめるには大変厳しいものがあります。ここでは、“自然の家”に置かれた環境特性から関連付けられるSDGsを選定し、活動のイメージがし易いように**敢えて目標を数点に絞って提示**しています。

但し、学校団体独自の活用方法や工夫によって、ESDの視点から下表に例示してあるSDGsを活動に応じて組み替えたり、新たなSDGsを付け加えたりしてカスタマイズしていただいても構いません。(むしろ、そうした展開がESD・SDGsの学びの深さや広がりにもつながります。)

該当するSDGs ターゲット	
 <p>6 安全な水とトイレ を世界中に</p>	<p>【目標6】 すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する。</p> <p>6.3 2030年までに、汚染の減少、投棄の廃絶と有害な化学物・物質の放出の最小化、未処理の排水の割合半減及び再生利用と安全な再利用の世界的規模で大幅に増加させることにより、水質を改善する。</p> <p>6.4 2030年までに、全セクターにおいて水利用の効率を大幅に改善し、淡水の持続可能な採取及び供給を確保し水不足に対処するとともに、水不足に悩む人々の数を大幅に減少させる。</p> <p>6.6 2020年までに、山地、森林、湿地、河川、帯水層、湖沼を含む水に関連する生態系の保護・回復を行う。</p>
 <p>12 つくる責任 つかう責任</p>	<p>【目標12】 持続可能な消費と生産のパターンを確保する。</p> <p>12.4 2020年までに、合意された国際的な枠組みに従い、製品ライフサイクルを通じ、環境上適正な化学物質や全ての廃棄物の管理を実現し、人の健康や環境への悪影響を最小化するため、化学物質や廃棄物の大気、水、土壌への放出を大幅に削減する。</p> <p>12.5 2030年までに、廃棄物の発生防止、削減、再生利用及び再利用により、廃棄物の発生を大幅に削減する。</p>
 <p>13 気候変動に 具体的な対策を</p>	<p>【目標13】 気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る。</p> <p>13.1 全ての国々において、気候関連災害や自然災害に対する強靱性（レジリエンス）及び適応の能力を強化する。</p> <p>13.3 気候変動の緩和、適応、影響軽減及び早期警戒に関する教育、啓発、人的能力及び制度機能を改善する。</p>
 <p>14 海の豊かさ を守ろう</p>	<p>【目標14】 海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する。</p> <p>14.1 2025年までに、海洋ごみや富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する。</p>
 <p>15 陸の豊かさ を守ろう</p>	<p>【目標15】 陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る。</p> <p>15.1 2020年までに、国際協定の下での義務に則って、森林、湿地、山地及び乾燥地をはじめとする陸域生態系と内陸淡水生態系及びそれらのサービスの保全、回復及び持続可能な利用を確保する。</p> <p>15.4 2030年までに持続可能な開発に不可欠な便益をもたらす山地生態系の能力を強化するため、生物多様性を含む山地生態系の保全を確実にを行う。</p>

③ 派生する目標

施設で学ぶことができるSDGsについては、前述①②で例示しました。下表は、施設での体験を踏まえて、今後、学校・学年・学級集団として、あるいは個人として活動が継続・発展するで

あろうことが期待される SDGs について触れています。

平成 30 年に改訂された『ESD 推進の手引』（文科省国際統括官付日本ユネスコ国内委員会）には、「ESD は、地球上で起きている様々な問題が、遠い世界で起きているのではなく、自分の生活に関係していることを意識付けることに力点をおくものです。地球規模の持続可能性に関する問題は、地域社会の問題にもつながっています。だからこそ身近なところから行動を開始し、学びを実生活から社会の変容へとつなげることが ESD の本質です。」と力説されています。

該当する SDGs ターゲット（例）	
	<p>【目標 1】 あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ。</p> <p>1.3 各国において最低限の基準を含む適切な社会保護制度及び対策を実施し、2030 年までに貧困層及び脆弱層に対し十分な保護を達成する。 ⇒「SDGs5, 10, 11, 16」差別の撤廃、全ての人々の包摂、公正・平和との関連</p> <p>1.5 2030 年までに、貧困層や脆弱な状況にある人々の強靱性（レジリエンス）を構築し、気候変動に関連する極端な気象現象やその他の経済、社会、環境的ショックや災害に暴露や脆弱性を軽減する。 ⇒「SDGs13」気候変動の早期警戒に関する教育との関連</p>
	<p>【目標 2】 飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する。</p> <p>2.1 2030 年までに、飢餓を撲滅し、全ての人々、特に貧困層及び幼児を含む脆弱な立場にある人々が一年中安全かつ栄養のある食料を十分得られるようにする。 ⇒「SDGs12」食料廃棄物・食品ロスとの関連</p>
	<p>【目標 11】 都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靱かつ持続可能にする。</p> <p>11.3 2030 年までに、包摂的かつ持続可能な都市化を促進し、全ての国々の参加型、包摂的かつ持続可能な人間居住計画・管理の能力を強化する。 ⇒「SDGs13」災害に対する強靱性や適応、早期警戒に関する教育との関連</p> <p>11.4 世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する。 ⇒「SDGs14, 15」海洋汚染防止、生物多様性の保全との関連</p> <p>11.6 2030 年までに、大気の水質及び一般並びにその他の廃棄物の管理に特別な注意を払うことによるものを含め、都市の一人当たりの環境上の悪影響を軽減する。 ⇒「SDGs12, 14」廃棄物の放出削減、海洋汚染防止との関連</p> <p>11.7 2030 年までに、女性、子供、高齢者及び障害者を含め、人々に安全で包摂的かつ利用が容易な緑地や公共スペースへの普遍的アクセスを提供する。 ⇒「SDGs5, 10, 15」女性の参画、差別の禁止、陸域生態系の保全との関連</p>
	<p>【目標 17】 持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。</p> <p>17.16 全ての国々、特に開発途上国での持続可能な開発目標の達成を支援すべく、知識、専門的知見、技術及び資金源を動員、共有するマルチステークホルダー・パートナーシップによって補完しつつ、持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップを強化する。 ⇒「SDGs6, 12, 14, 15」地域連携による地域の課題解決との関連</p> <p>17.17 さまざまなパートナーシップの経験や資源戦略を基にした、効果的な公的、官民、市民社会のパートナーシップを奨励・推進する。 ⇒「SDGs6, 12, 14, 15」地域連携による地域の課題解決との関連</p>

このように施設にある活動プログラムの特性を踏まえ、SDGs の目標と関係が深いと考えられる項目（ターゲット）を上述してきた分類①～③に当てはめてみました。

SDGs の学びは、活動を行うことを通じて SDGs が一つの目標のみに完結できない目標・課題であることに気づきます。つまり、連鎖的に様々な SDGs につながり、複雑に絡み合っていることが理解できます。したがって、これまで施設として当てはめてきた各説明では十分に SDGs を網羅できていない部分も多く、あくまでも例示した SDGs やその分類は施設からの提案としてお考えください。

換言すれば、提示されている各 SDGs は、施設活動をきっかけにして“レバレッジ・ポイント”（問題構造のツボ）を捉える際の例示にもなっています。学校・地域での ESD・SDGs の事前学習や事後学習、または施設での学習をとおして行われる活動によって新たな発展や取組の充実につながりますことを期待しています。

最後に、これまでに説明してきた ESD・SDGs を踏まえて、施設で体験できる活動プログラムを紹介するよ。

活動プログラムをうまく活用して、ESD・SDGs の学びにそれぞれカスタマイズしてみてください。



【夜須高原で体験できる活動プログラム①】



- オリエンテーリング
- フィールドビンゴ
- ウォークラリー
- フォトラリー
- 五玉神社の謎を解け！
- ひるもりビンゴ
- 夜須高原アドベンチャーウォーク
- ナイトハイキング
- 大根地山登山
- 秋月城下町ハイキング
- 夜須高原記念の森ハイキング
- キャンプファイヤー

※それぞれの活動プログラムの詳しい説明は、『活動資料集』をご覧ください。

本プログラムに該当する SDGs (目標とターゲット例)	
	<p>【目標 15】 陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る。</p> <p>15.1 2020 年までに、国際協定の下での義務に則って、森林、湿地、山地及び乾燥地をはじめとする陸域生態系と内陸淡水生態系及びそれらのサービスの保全、回復及び持続可能な利用を確保する。</p> <p>15.4 2030 年までに持続可能な開発に不可欠な便益をもたらす山地生態系の能力を強化するため、生物多様性を含む山地生態系の保全を確実に行う。</p>



活動前に、自然の豊かさ(生物多様性)への気づきを促したり、活動後に生態系の保全について考えたりする機会を設けてみてはいかがでしょうか。

本プログラムに該当する SDGs (目標とターゲット例)	
	<p>【目標 12】 持続可能な消費と生産のパターンを確保する。</p> <p>12.4 2020 年までに、合意された国際的な枠組みに従い、製品ライフサイクルを通じ、環境上適正な化学物質や全ての廃棄物の管理を実現し、人の健康や環境への悪影響を最小化するため、化学物質や廃棄物の大気、水、土壌への放出を大幅に削減する。</p> <p>12.5 2030 年までに、廃棄物の発生防止、削減、再生利用及び再利用により、廃棄物の発生を大幅に削減する。</p>

夜須高原の森では、ゴミが散乱しているところや不法投棄を見かけることもあります。活動後に、そうした姿に気づいたか、それは生態系にどのような影響を与えるのか、自分やグループは森の中でどのように心がけたか、あるいは今後はどのように行動していきたいか等を話し合ってみてはいかがでしょうか。




【夜須高原で体験できる活動プログラム②】




- 野外調理
- 川遊び
- 溪流遊び
- 焼杉クラフト
- 焼杉コースター
- プラホビー

※それぞれの活動プログラムの詳しい説明は、『活動資料集』をご覧ください。

本プログラムに該当する SDGs (目標とターゲット例)	
 <p>6 安全な水とトイレ を世界中に</p>	<p>【目標6】 すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する。</p>
	<p>6.3 2030年までに、汚染の減少、投棄の廃絶と有害な化学物・物質の放出の最小化、未処理の排水の割合半減及び再生利用と安全な再利用の世界的規模で大幅に増加させることにより、水質を改善する。</p>
	<p>6.4 2030年までに、全セクターにおいて水利用の効率を大幅に改善し、淡水の持続可能な採取及び供給を確保し水不足に対処するとともに、水不足に悩む人々の数を大幅に減少させる。</p>
	<p>6.6 2020年までに、山地、森林、湿地、河川、帯水層、湖沼を含む水に関連する生態系の保護・回復を行う。</p>



「野外調理」の活動前に、水の無駄遣いについて意識化を図ったり、油や洗剤等の排水が水質を汚染することについて考え、その使用を最小限に抑えたりする実践はいかがでしょうか。
「川遊び・溪流遊び」では、水生生物の豊かさにも気づかせる機会にはいかがでしょうか。

本プログラムに該当する SDGs (目標とターゲット例)	
 <p>12 つくる責任 つかう責任</p>	<p>【目標12】 持続可能な消費と生産のパターンを確保する。</p>
	<p>12.3 2030年までに小売・消費レベルにおける世界全体の一人当たりの食料の廃棄物を半減させ、収穫後損失などの生産・サプライチェーンにおける食品ロスを減少させる。</p>
	<p>12.4 2020年までに、合意された国際的な枠組みに従い、製品ライフサイクルを通じ、環境上適正な化学物質や全ての廃棄物の管理を実現し、人の健康や環境への悪影響を最小化するため、化学物質や廃棄物の大気、水、土壌への放出を大幅に削減する。</p>
	<p>12.5 2030年までに、廃棄物の発生防止、削減、再生利用及び再利用により、廃棄物の発生を大幅に削減する。</p>

「野外調理」で、食品ロスの問題を念頭に自分たちで食べられる分量を考えたり、食品廃棄物の発生によって水質の汚染やゴミ燃焼による CO₂ 排出を想起する機会にしたりしてはいかがでしょうか。



本プログラムに該当する SDGs (目標とターゲット例)



【目標 14】
海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する。

14.1 2025 年までに、**海洋ごみや富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する。**



水環境への影響はわずかとも言われていますが、米のとぎ汁は赤潮やアオコ発生の一因になりますし、スポンジの使用によって生じる細かな破片はプラスチックごみにもなり得ます。そうした気づきへとつながる投げかけをされてはいかがでしょうか。

【参考】… SDGs のつながりについて

例えば、SDGs「1. 貧困をなくそう」と「6. 安全な水とトイレを世界中に」は密接な関係があるといわれています。安全な水を得やすいほど、極端な貧困が少ない傾向にあることが確認されています。

国連世界食糧計画 (WFP) は、学校給食支援で複数の SDGs を達成したと報告しています。「2. 飢餓をゼロに」を掲げて学校給食支援→子どもが元気になる→読み書きを学ぶ→職業に就ける→収入が上がる→治安が良くなる、という循環が生まれ、他の SDGs「4. 質の高い教育」「11. まちづくり」等への波及効果が認められました。

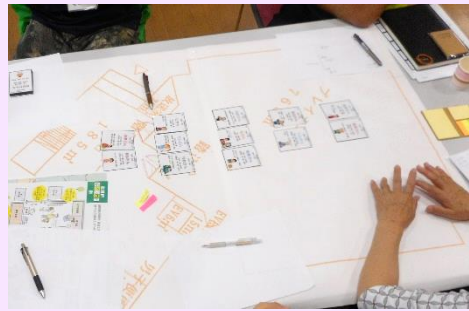
注意しておきたいことは、夜須高原の活動プログラムをそのまますれば、結果として“ESD や SDGs の学びになる”ということではありません。

活動プログラムをうまく活用して、これまでに説明してきたことを踏まえて活動内容を工夫すれば、そうした学びへと発展・充実化させることができる…という提案としてお考えください。



もちろん、厳格に実践しなくても、ESD や SDGs の**学びの要素を少しだけ取り入れてみる**…といった企画も可能です。施設での活動目的や宿泊日数、体験できるプログラム内容等を考慮すると、むしろそのような実施の方法しかできない場合もあるかもしれません。

【夜須高原で体験できる活動プログラム③】



○HUG (ハグ) 避難所運営ゲーム

※福岡県地域安全協会（一財）代表の山本一氏の監修により製作した夜須高原オリジナルプログラムです。利用ご希望の際は、事前にご相談ください。



学校で行っている「防災・減災教育」の一環として取り入れてみてはいかがでしょうか。ふりかえり等も含め、約2時間の活動です。多様な立場の人が待機する避難所の運営は、様々な配慮や対応能力が必要です。カードゲームをとおして、避難所運営だけにとどまらない多様な配慮の視点や行動力を育むことができます。

* 当施設は、筑前町の災害時における避難所に指定されており、本プログラムは教育事業等で活用されています。

本プログラムに該当する SDGs（目標とターゲット例）

<p>13 気候変動に具体的な対策を</p>	<p>【目標 13】 気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る。</p>
	<p>13.1 全ての国々において、気候関連災害や自然災害に対する強靱性（レジリエンス）及び適応の能力を強化する。</p> <p>13.3 気候変動の緩和、適応、影響軽減及び早期警戒に関する教育、啓発、人的能力及び制度機能を改善する。</p>

学習をとおして広がる SDGs（目標とターゲット例）

<p>11 住み続けられるまちづくりを</p>	<p>【目標 11】 都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靱かつ持続可能にする。</p>
	<p>11.3 2030年までに、包摂的かつ持続可能な都市化を促進し、全ての国々の参加型、包摂的かつ持続可能な人間居住計画・管理の能力を強化する。</p> <p>11.7 2030年までに、女性、子供、高齢者及び障害者を含め、人々に安全で包摂的かつ利用が容易な緑地や公共スペースへの普遍的アクセスを提供する。</p>
<p>17 パートナシップで目標を達成しよう</p>	<p>【目標 17】 持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。</p>
	<p>17.16 全ての国々、特に開発途上国での持続可能な開発目標の達成を支援すべく、知識、専門的知見、技術及び資金源を動員、共有するマルチステークホルダー・パートナーシップによって補完しつつ、持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップを強化する。</p> <p>17.17 さまざまなパートナーシップの経験や資源戦略を基にした、効果的な公的、官民、市民社会のパートナーシップを奨励・推進する。</p>

※「共助」を考える視点にもつながります。

おわりに

江戸期から明治期の近江商人の商い信条に、「三方よし」という言葉があります。売り手よし、買い手よし、世間よし、です。SDGsを推進する人々の間では、これを更に3つ（作り手よし、地球よし、未来よし）付け加えた「六方よし」が提唱されています（元国連広報センター長・現SDGsパートナーズ有限会社代表取締役CEO 田瀬和夫氏）。これは、企業は社会的責任を持つというCSR（Corporate Social Responsibility）の考え方に対し、新たにSDGsを踏まえた現代版の企業経営理念としての発展性を秘めています。

翻って、私たち“教育”に携わる青少年教育施設はどうでしょうか。本ガイドの作成過程においてESDやSDGsと向き合った時、国立夜須高原青少年自然の家はこれに“過去よし”を加えた「七方よし」の考え方に辿り着きました。売り手よし（施設）、買い手よし（利用団体）、世間よし（存立する地域）、作り手よし（利用者）、未来よし（行動変容・社会変容）、過去よし（歴史的立地環境・教育財産）、の七方です。

SDGsを推進する立場からは、過去を「オール善」とするか賛否が分かれることでしょう。「無秩序に文明発展をしてきた様々なツケが、現在の地球環境や社会生活の問題として噴出してきている」「未来社会の存立が危ういからこそ、これまでの反省を踏まえSDGsなる目標ができた」…という視座に立てば、過去を手放しで評価することは難しいと思われます。

しかしながら、ここ夜須高原の利用者の多くが「自然の素晴らしさ、豊かさを感じた」「大自然の中でリフレッシュできた」等の感想を寄せており、自然環境に恵まれた施設（地域）であることに改めて気づかされます。これは古来より自然と共存し、守り、大切にしてきた地域住民の生活そのものの姿でもあります。そして、当施設が設立されて31年間、環境保護への理解とこの地域に敬意とマナーで接し、自然の恩恵を享受してこられた施設利用者の方々や「自然環境を生かした活動プログラム」「関係団体とのネットワーク」など多くの教育財産を残していただいた歴代職員のお陰でもあります。すなわち、「過去よし」です。

このことを踏まえ、私たち夜須高原は「過去よし」をESD・SDGsの学び・気づきとしても発信し、SDGsの要となる「未来よし」「地球よし」のゴールに貢献できればと考えています。

「Think globally, Act locally」「Leave no one behind」のスローガンを胸に、本ガイドを手にしていただいた学校の先生方、そして実際に体験活動をされる児童・生徒の皆さんと是非「七方よし」の夜須高原で、共に手を携えて行動していきましょう。

2020年（令和2年）6月5日
国立夜須高原青少年自然の家職員一同

令和2年（2020年）6月5日 国立夜須高原青少年自然の家 ESD・SDGs プロジェクトチーム
〔代表執筆者：企画指導専門職 上野 修司〕

<p><i>National Institution For Youth Education</i> <i>National Yasukozen Youth Outdoor Learning Center</i></p> <p>YASUKOGEN SDGs project</p>	<p>SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS</p>
<p>「国立夜須高原青少年自然の家」は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。</p>	